

(四) 播磨鍋なべ（野里鍋）

播磨鍋 平安時代には、播磨の特産は、杉原紙すぎはらがみに播磨鍋といわれたほど播磨鍋は有名でした。播磨鍋は、中国山地の砂鉄を用い、古くから宍粟郡しそや佐用郡さようで造られていた千草鉄ちくさてつという良質の鉄で製造されました。播磨の鑄物師いもじは、この鉄を原料にして鍋や針を造り、京都にまでも売り出していました。



播磨鍋と爛鍋かん

室町時代には、この播磨鍋の生産の中心が、姫路市内の野里地区であったことから野里鍋とも呼ばれました。野里の鋳物師の中でも、代表的なのが、芥田家で、一五六八年（永禄十一年）には、播磨国中鋳物師惣管職といわれる鋳物師の頭になり、秀吉の時代には、播磨の代官をも務めました。

芥田家は代々五郎右衛門を名乗り、姫路築城や大砲造りなどにつくし、特に、京都の方広寺のつり鐘造りには、播磨の鋳物師百数十人を連れて、脇頭領として



勝瑞寺のつり鐘

に参加しました。このつり鐘には、国家安康の銘文がありますが、この四文字が、豊臣氏と徳川氏との間に重大な問題をひき起こしたという有名なつり鐘です。このように、



播磨の判枡
(国指定の重要文化財)

鋳物師らは鍋のほかにも、釜や農具のくわ、すき、そのうえ、つり鐘までも造りました。市内御立の勝瑞寺の一四九七年（明応六年）に造ったつり鐘、亀山本徳寺にあるかつての英賀御堂のつり鐘（一五六六年、永祿九年）は、いずれも芥田家の造ったもので、ともに姫路市指定の文化財になっています。

また、芥田家には、代官を努めた関係から、播磨の判枡があります。これは、秀吉が播磨一円で使用し、石高や年貢を量った標準の枡でした。底裏に枡の寸法と天正十八年（一五九〇年）の年号が書かれ、内側には、池田家の家紋「丸に揚羽の蝶」の焼印が押されています。